歡喜の譜

（受洗の友へ）

復び慢を懼く靈に非ずアバ父とよぶ子たる者の靈なり（羅八ノ一五）

夢よりさめてますら夫は
あたりにものをもとめけり
眺めむなしき昨の野は
美はしき霧立ちのぼる

天女の愛のさゝやきの
かすかに耳に殘るらむ
尋ぬる影は見えなくに
たゞあたゝかしその心

胸の緒琴の絃ふれて
高きしらべの鳴りやまず
悟も悔も悲しみも
よろこびの譜となりにけり

神のめぐみのみ光りを
ゆたかに浴びしその胸に
信の一念固ければ
徂徠の雲も面白き

初更默坐の瞑想より
さめて香焚く靜心
靈かゞやく聖の宮に
君といのれる心地するかな
並び居る沈默くらべの時の興沖の靈火を怪しとも見ず

歡迎の歌

その人は獵兵なりき
彼等は更に愈れる所すなはち天にある所を慕へり（希伯來書十一ノ一六）
勝利のつはもの故郷を
忘れでかへる嬉れしさに

わがともがらは打寄りて
ほぎのうたげを開くなり
蕎麥の花咲く秋風の
里の徑に馬立てゝ
見よ產土神の杉の木は
昔しながらに高かるを
山は紅葉の八重錦
野邊は黃金の稻の浪
あゝつはものよ君が爲め
祝ひのむしろ飾るなり

世は汝が名を忘るとも
勝利を負ふに堪へざる
心弱げのまなざしの
悲哀しき人を忘れんや

建てしいさをを神に歸して
身をへりくだる心こそ
紫綬の名譽にいやまさる
光榮ならずや限りなき

すみれと薔薇の花束の

高き香を捧げつゝ
汝が頰に寄る接吻の
それは華やぐ都ぶり

こゝは直黄に柿熟れて
大根肥えたる一在所
男誇りの手力に
いざ胴上げして祝ひなむ

安からむ世が定めたる習はしのたゞごと追ひてあらば
安からむ
今はたゞ默して謝せよなきがらに歌舞伎がゝりの情は
言ふな

暗香

座古愛子嬢の病床に
かれは十年全身不隨の症になやめり
女よ爾の信なんぢを救へり安然にして往け（可
五ノ三四）

かたき病に玉の緒の
絶えなんばかり惱みては
君少女子のか弱さに
うべ黑髪も亂れけむ
氣高き愛のみ姿を

まほに仰がん世なりせば
曳かすみけしのみもすそに
いかで這ひてもすがらんに
毒をもるべき杯に
溢るゝまでのみ惠みを
受けつる今はまなざしに
望みの色のかゞやかん
君仰ぎ見よ天つ日の
渡らふきはみ海のはて
光榮かゞやくキリストに

現はれませし大神を

心靜かにふす床に
春の光やさしくらむ
君が枕に香はする
梅の一枝もあれよかし

とばかりたわれは證明さん苦しみの切の祈りを神きゝ
ませり

嘆くには未だしあつき信の手に叩けよさらば戸は開か
れん(二)教信のはしに)

片影

わが教會に篤信なる盲の人あり金曜の夕日曜の朝、一隅に身を倚せて廟然時を保てる渠を見ざることなし

慢るゝ勿れ只信ぜよ(路八ノ五〇)

固くたのめる信仰には
シロアムの池にあらねども
清く湧きづる眞清水を
掬び上げなむすべもあれ

朝の光夕づく日

みどり紅オレンヂの
天の彩こそ知りまさね
なほいやまさる光明の

心の眼ひらけたる
瞳はとはに若からむ
聖の宮居に立たす主の
ま白き衣も仰ぐべく

靈の海にそゝぎ入る
高き理想のかゞやきは
白日の光を仰ぐとも

之ぞ知る數は少きを

浮きたる望み斷ちたれば
只杖のみの安からむ
怖るゝ勿れ何處にも
道は眞すぐに開けたり

獨箴

われはたゞ祈る也(詩一〇九ノ四)

智者安にある學者いづくにあるこの世の論者
いづくにある神は此世の智慧をして愚ならし
むるに非ずや(哥前一ノ二〇)

そは猶ほ德の低ければ也
不義のやからのはびこれる見て
ソドム、ゴモラを滅ぼせしごと
硫黄の雨のそこにあふれと
人には堪べぬ怒ある時
神はかゞやく日のみ光を
よきやからにも惡しき者にも
等しく頭に照らし給へり

そは猶ほ愛の狹ければ也
弱ければこそ躓きにけれ
汚れのあとの衣のしみを
唯冷やかに人は見やりて
言ふさへも愧とせる時
神は罪ある放蕩兒の
歸り來にしを迎へ抱きて
泪の中に喜びませり

そは猶ほ信のうすければ也
波に溺れし友のかばねを
渚にあげて手だて盡せど
胸は硬りて脈はや搏たず
墓ひやゝかに渠を待つ時
「そはたゞ假に眠り居るなり

出でよ」と神子の呼ばすと共に
ラザロは復りて墓を出たり

そは猶ほ力弱ければ也
重荷をいとひ義務を避け
他を羨み嘲ちつぶやき
我名を成すに忙しうして
數の權謀に疲れたる時
人に捨てられ世に攻められし
十字架上の悲哀の人は
「我れ世に勝てり」と叫び給へり

そは猶ほ心淺ければ也
泪の以上に悲痛はなく
樂しき極みそは接吻と
壓制ふるをもて權威と云はゞ
欺く以外の智慧もなからむ
げに淺きかな人てふものや
あゝ我れ祈る眞の光を
人の心の奥に照らせと

たゞさきは裝れたらずやかくまでにおごらんものか勝
のひと時
ひと時の心おごりに酒盃を碎くばかりの人の子の悔
ますら夫とせめて一度よばましを蓙ふく風にわれを立

たすな

劍を受くる歌

一　序歌

嗚呼わが腸よ我腸よ、痛苦心の底におよびわが心胸どゞろく、われ默しがたし我靈魂よ汝笛の聲と軍の聞を聞く也（エレミヤ四ノ一九）

江の北、立つ秋早く
寂として金氣充ちたり
こもりゐの精舍をめぐり
秋の聲高きにわたる

凛として迫るものあり
默念の膝はくづれて
ひたすらに忍べる疵は
また更に痛みを覺ふ

天の川西に流れて
七星もかたちあらため
さわがしき下つ世國の
うちきほふ樣見守るか

思ひやる冀北の牧場
深草の露ふみしだき

鬣の長きふるひて
嘶ける駒や肥ゆらむ

功名のちまたくゞりて
うつ劍は折れつくしたり
かつ殘る意氣は昂るも
我腕すでに萎へたり

秋霜の烈負ひし爲め
わがめぐり皆敵となる
さいなみの笞避けむも
吾足は疲れはてたり

世の網はきびしく張りて
吾歩み移すすべなし
一片の雄心いだき
秋の聲きくに堪へむや

二

大水はこゑをあげたり、エホバよ大水はこゑをあげたり、おほみづは涙をあぐ(詩九三ノ三)

しひたげの聲に交りて
助け呼ぶ弱き泣聲
東に雲妖うして
天が下さわぎてありけり

天が下騒ぎてありけり
暴逆の平和の賊を
うちこらす正義の剣
神よ、我に授け給へ

汝の命我にあるを
我深く心に覺ふ
たぐひなき双刃の剣
神よ、我に授け給へ

執念のさひなみたゝぬ

膽小さきやからの前に
わが屍さらしても見む
神よ、我に剣とらせよ

赦されし罪のみむくひ
戰ひの場にかへざむ
とく賜へ、我に剣を
天が下亂れ急なり

三度われ神に求めし
ねぎ言のみ許しなくに
戰ひの場はひらけぬ

ますら夫の血こそ湧くらめ

戰ひは酣はにして
凱歌は天に揚れり
踴り立つ胸を抱きて
空しき日繰るに堪へんや

三

爾曹我を選ばず我なんぢらを選べり且爾曹をして往て實を結ばせ其實を存しめんが爲めまた爾曹の凡て我名に託て父に求ふ所の者を彼なして爾曹に賜らせんが爲に我なんぢらを立たり（約一五ノ一六）

いとほしの子よ來り立て
世の人の嘲みのゝしり
忍び得ぬ胸さ程にも
わが惠み汝に足らずや

いとほしの子よ思ひやれ
逸り夫のたけり狂ひに
惜まざる命さまでに
わが惠み汝に足らずや

いとほしの子よ穩かに
心して其身思はゞ

おのづから我授けたる
ゆゑよしの深き知るべし

剣把りて勝ちしやからは
やがてその刃のさびに
おのが身を亡ぼせるなり
されど世はそをほめ歌ふ

石ぶみに刻まれし名は
永遠の我前にして
意味も無き空しき文ぞ
されど世はこを追求む

しかはあれ汝もつはもの
いざ立ちて固めよろひね
まづ燃ゆる聖の焔に
汚れたる身をば清めよ

いざ授けむ靈の剣
なれが世はこの世にあらず
十二軍雲井はるかに
凱旋の門も狭からむ

四

父よ今我をして爾と偕に榮を得させ給へ即ち

創世より先に爾と僧に有ちし所の榮を得させ給へ（約一七ノ三）

あなうれし靈の劍
エデンの園東の方
燃えめぐる焔のつるぎ
やがてわが腰に落ちたり

あな尊と取り佩く太刀の
空鳴りの音聞きてだに
わが胸に深く潜みし
仇こそは影匿したれ

類なき双刃の劍
振りかざし進む前には
刃向はむ仇もなからむ
吾腕強くせでやは

二つなきみ選び受けて
戰ひの野に進むとき
勝利はたゞ神に歸せむ
一念の感謝のまゝに

この劍不義の前に
自から鞘走るなり

悔の聲聞くに及びて
納むるに愛はさゝやく

さいはひやわが日の本
義の光ゆたかにあびて
勇ましく馳せ戰ふを
心ゆも勝をぞ祈る

神よわが心定まれり
いざ歌はむ平和の日まで
この劍佩きて雄々しく
光榮の歌を歌はむ

（日露の役のはじめに於て人に寄せたる）

頌榮畢

明治三十九年十一月二十日印刷
明治三十九年十二月十五日發行

頒價 金四十五錢

著者 一色義朗
東京市京橋區五郎兵衛町二十二番地
發行者 中山三郎
東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷者 河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
印刷所 株式會社 國光社

不許複製

發兌元 東京市京橋區五郎兵衛町
京華堂書店

文淵堂發兌圖書發賣元

東京市神田區表神保町　東京堂書店
東京市神田區裏神保町　上田屋書店
東京市京橋區尾張町二丁目　東海堂書店
東京市日本橋區吳服町　北隆館書店
東京市京橋區中橋廣小路六番地　前川文榮閣
大阪市東區南渡邊町　杉本書店
久留米市米屋町　菊竹金文堂
名古屋市宮町一丁目　星野文星堂

明治三十九年十一月改正

東京　金尾文淵堂書店

藏版圖書一覽

宗教書類

綱島梁川 **病間錄** 三版 金壹圓 小包料拾錢

中村春雨 **新約物語** 再版 金壹圓 小包料拾錢

同 **舊約物語** 近刊 金壹圓五十錢 小包料壹圓五錢

中村春雨解說 松井昇畫解 **キリスト物語** 新刊 金拾錢 郵稅二錢

海老名彈正 **靈海新潮** 新刊 金八拾錢 郵稅八錢

清澤滿之 **懺悔錄** 新刊 金七拾錢 郵稅八錢

浩々洞同人 **沈思錄** 近刊

吉水智海 **支那佛教史** 新刊 上製六十錢 並製四十五錢 小包料十錢

雜書類

五十嵐力 **兒童の研究** 新刊 金壹圓 小包料拾錢

山路愛山 **社會主義管見** 新刊 金三十錢 郵稅六錢

子規自筆 **俳人芭蕉** 木版 金壹圓 小包料拾錢

蕪村自筆 **俳諧三十六歌仙** 木版 金壹圓 小包料拾錢

淺倉無聲 **日本小說年表** 新刊 金壹圓 小包料拾錢

安部磯雄 **理想の人** 新刊 金七拾錢 郵稅八錢

浩々歌客 **鷗心錄** 近刊

小說書類

菊池幽芳	妙な男	(二冊)	各金六十錢 郵税各八錢
同	七日間	(賣切)	
同	秘中の秘	(近刊)	
中村春雨	密航婦	(新刊)	金七十錢 郵税八錢
同	無花果	(十版)	金七十錢 郵税八錢
同	雛鳩	(賣切)	
同	犯さぬ罪	(近刊)	
同	炬火	(近刊)	

小說書類

木下尙江	火の柱	(十三版)	金參拾五錢 郵税六錢
同	良人の白	(全三冊)	各三十五錢 郵税各六錢
同	良人の自白續篇	(新刊)	金五十五錢 郵税八錢
須藤南翠	間一髪	(新刊)	金七十五錢 郵税八錢
柳川春葉	緣の糸	(新刊)	金六十錢 郵税八錢
大倉桃郎	琵琶歌	(四版)	金六十錢 郵税八錢
同	舊山河	(新刊)	金六十錢 郵税八錢
佐野天聲	露の曲	(新刊)	金六十錢 郵税八錢

小說書類

嚴谷小波	喜劇七草	新刊	金八十錢 郵稅八錢
佐野天聲 脚本	不死の誓	近刊	

詩文畫集類

薄田泣菫	白羊宮	新刊	金壹圓 小包料拾錢
同	暮笛集	三版	金六十錢 郵稅六錢
同	白玉姫	新刊	金八十錢 郵稅八錢
同	子守唄	近刊	
與謝野鐵幹	むらさき	切品	
與謝野鐵幹 同晶子	毒艸	四版	金六拾錢 郵稅八錢
與謝野晶子	夢の華	新刊	金八十錢 郵稅六錢
同	みだれ髪	切品	

詩文畫集類

與謝野晶子
小扇（四版）金三十五錢 郵税四錢

與謝野晶子 山川登美子 増田雅子
戀ごろも（三版）金四十錢 郵税四錢

ミヲー野口米次郎
劍と戀の日本（品切）

高安月郊
寢覺草（新刊）金六十錢 郵税八錢

河井醉茗
塔影（新刊）金四十五錢 郵税六錢

鳥居君子
上總のやどり（新刊）金二十錢 郵税四錢

卅八年度
白馬會紀念畫集（新刊）金九十錢 郵税不要

小林萬吾 風景
水彩畫帖（新刊）金五十錢 郵税不要

月刊書類

島村抱月主幹
早稻田文學 毎月一回一日 一冊金二十錢 郵税一錢五厘

丸山晩霞主幹
水彩畫講義錄 毎月一回十五日 會費一ヶ月六十錢

早稻田文學

編輯所　東京牛込區藥王寺前町廿番地　早稻田文學社
東京牛込區中町三十五番地　文藝協會事務所
文藝協會
○毎月一回一日發行一冊廿錢郵稅一錢半
○一年前金二圓四十錢（郵稅不要）

一本誌は元坪内逍遙氏主幹の下に七年間文壇の重鎭たりしもの、一旦休刊の後明治三十九年一月新なる希望と抱負とを以て再興せられたるものなり。

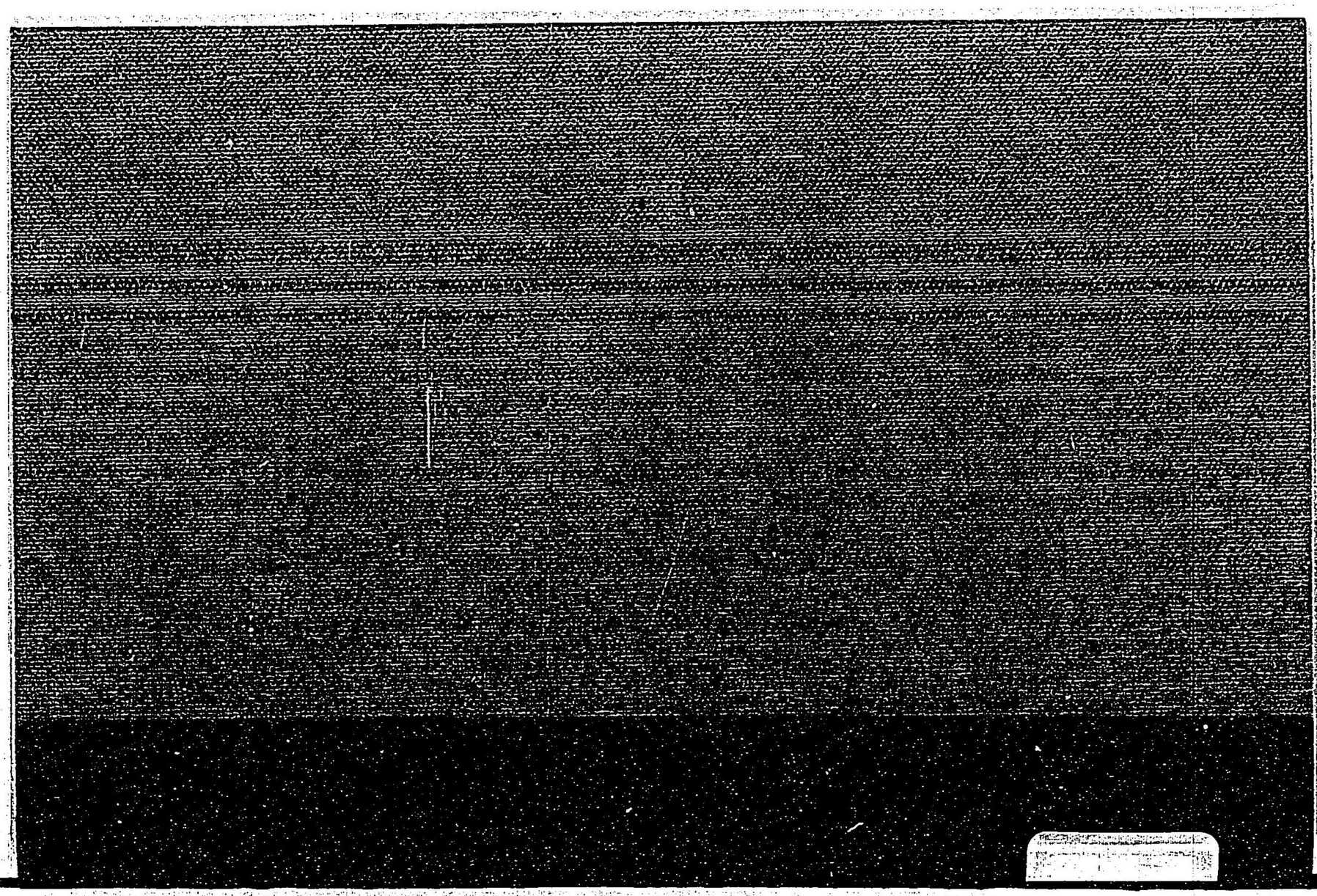
一本誌は文學、美術、演藝、宗教、哲學、史傳、風俗、各方面の評論及び小說、詩歌、脚本等の創作、飜譯を文壇の新舊諸派にわたりて、選拔採錄すると共に、毎號卷頭には數十頁の長論說若しくは創作飜譯等の完結せるものを載せ、是而已にても優に一冊の著書たるに足るの面目を具へしむ。

一本誌の彙報欄は文藝教育諸方面の現狀を彙集し評拆して精博公平穩健を旨とし文壇の趨勢をして一眸の間に去來せしむ、是れ本誌の擅場なり。

一本誌現在の主幹者は島村抱月氏なり。

一本誌は文藝協會と聯合し之が機關として文藝の實際方面に活動する外、採錄する所の文章には何等の偏したる標準をも挾むことなし。

發兌元　東京市京橋區五郎兵衛町二十二番地　金尾文淵堂



特22
144

頌栄

国立国会図書館

087983-000-8

特22-144

頌栄

一色 醒川/著

M39

DBG-0073